

会員の声



私の心を短歌にのせて

徳永秀子

性被害防ぐ手立てのひとつには 親子の信頼話し合い
女でも男でもなく我々は まず第一に人間である

助け合い仲睦まじく支え合い 人と人をつなぐが夫婦
成長は体と共に心にも 正しい知識育めモラル

DVに性暴力の加害者は 獣同然虫喰う心

身を守る正しい避妊学ぼうよ 注意と心得明るい未来

差別する醜い心偏見の 濁ったまなこ根にある無知

はるな愛 マツコデラックス イツKOさん

尊敬できる充実人生

男はこう女はこうと従うは もうご免だ進めジェンダー

第九コンサートにて

加藤音子

ベートーベンの第九コンサートに行った。あの曲は年末に上演されることが多いから、春に開催なんて珍しいことだ。でも別に決まりがあるわけではないし、初演は5月だったという記録も残っている。

初めて第九を聞いたのは確か中学生の時だったが、そのスケールの大きさに、感動した。小学生の頃からピアノを習っていた私は、ベートーベンのファンになった。音大へ進むエネルギーの一助となったほどだ。

だが、この度は、私はあることを知りたくて、コンサートに足を運んだのだ。合唱団に知人が数名参加しているから、応援したい気持ちもあつたけれど。

数年前から難聴になり、病院を回っても原因はわからず、快方にも向かわず補聴器に頼る生活となった。会話が不明瞭で、筆談する時もあるが、ピアノやオルガンの音は聞こえるように調整して貰い、なんとか音楽活動が続けることは出来たが。

西欧では補聴器の歴史は古く、ベートーベンも使用していた。若い頃にドイツ旅行に行く機会があり、ボンのベートーベン記念館を訪れると彼の遺した補聴器が展示されていた。今の固定電話くらいの大ききでラッパのような形だったから、ヘッドホンのように使ったのだろうか？ 補聴器は曲のテンポを示すメトロノームを作ったメルツェルが開発。このメルツェルは兄弟で、一人は補聴器、一

人はメトロノームを考案したというから、ベートーベンにとって頼もしい存在であつたに違いない。ちなみにベートーベンの墓はメトロノームの形をしている。

さあ、第九の演奏が始まった。嵐のような一楽章、速い二楽章、穏やかな三楽章を経て、いよいよソリスト、合唱団が入場して四楽章へと進んだ。オーケストラが一楽章の触りの節を奏でたり、有名な歓喜の歌が流れたり、次なる展開に胸を弾ませる時となる。突然バリトン歌手が、「オオ、フロイデ、ニヒト・・・」（おー友よ、この様な音ではない、もっと喜びに満ちた音楽を奏でよう）と歌い出す。やがて合唱団が「フロイデ」（歓喜）を繰り返して叫ぶ。シラー作詞、歓喜の頌栄の調べが会場に響きわたり、曲は佳境に入っていく。何時もこの部分で胸が熱くなる。人類愛を高らかに謳い上げ、平和な日々が永遠に続くよう祈ったベートーベンの思いに、心は

高鳴る。「さあ、準備しななくては」曲のエンディングが近くなつて来た。私は目的を果たさねばと、耳に手を当てた。この曲には、有名なエピソードがある。初演の時、観客の拍手、歓声が指揮を執ったベートーベンには聞こえず、歌手の一人が背中を押して振り向かせたというのだ。今の補聴器を使えばどんな風か？ 試してみたい。私はそつと補聴器を外した。やはり聞こえない。すぐに補聴器を戻すと、場内の大拍手、「ブラボー」の音が、はつきり耳に届いた。ベートーベンが第九を作つてから、来年で丁度二百年になる。歳月の重みを噛み締めていると「困難を駆け抜けて、歓喜に至れ」ベートーベンの言葉が思い起こされた。

